
聞き書きとその周辺

Backstage of Folk Narrative Recording

香月洋一郎 KATSUKI Yoichiro
(神奈川大学／日本常民文化研究所)

1.

神奈川大学の香月です。

今日は外語大のCOEのプロジェクトのシンポジウムということでここに座っておりますが、実は私どもの神奈川大学でもCOEのプロジェクトを組んでおります。私もそのスタッフの1人で、そのテーマは非文字資料の体系化。つまり、NONWRITTEN CULTURAL MATERIALSの研究なわけですが、私のそういった自分の本来の大学の作業を通じて、日本では諸資料の整備が大変遅れている。ぜひこれは、いろんな意味で進めなければいけないと痛感しています。

それが前提なんですけれども、ただ、今日この場で私がお話しできるのは、私がこれまでずっと行ってきた聞き書きという資料の作成プロセスについてです。これがいかに、いかげんであまいなものかと。そのことは、聞き書きを始めてもう30年になりますけれども、ずっと痛感してまいりました。いろんな矛盾をはらんでいる資料を作成する方法だと思えます。ただ、その矛盾を切り捨てると、聞き書きという方法の生命力の大切な面が消えてしまうように思えます。だとするとその矛盾と、どういうふうにつき合っていくか、それがこの方法の中に潜んでいるひとつの本質ではないかなと。そういうことをずっと考えてきて、確かにこれは限界というものはあるんだろうけれども、限界の線の下に、おそらく可能性が本質的で切実な形で潜んでいるのではないかと。取りあえずそう思って、聞き書きをずっと続けてまいりました。

ただ、私自身は聞き書きの方法論そのものを、特にテーマとしてきたわけではありません。ライフ・ヒストリーを聞くというのは、私の調査の比重の中でほぼ3分の1になります。残りの3分の1のひとつは、集落景観論です。この外語大の近くに調布飛行場がありますけれども、私はあそこからしょっちゅうセスナに乗って——私自身が操縦するわけではなくて——、むらの写真を撮るんですけれども、大体これまで200時間ぐらいセスナに乗っております。8000コマぐらい日本の集落を撮って、その分析は実は先ほど申しました自分の大学でのCOEでの作業になります。それからもうひとつは、生産技術の調査。2年前に、何か話せということでこの外語大の別の研究会に呼ばれたことがあるんですが、その時のテーマというのは、職人にとって近代とは何であったかということで、必ずしも私はオーラル・アーカイヴといった問題の視点を中心にしてきた者ではないんです。

では、そんなふうにはばらばらの三つのことをやって、いったい何をやりたいんだと言われると、基本的に私は民俗誌を書くためにそうしています。私は宮本常一という民俗学者に師事をしましたが、宮本先生は目のつんだ民俗誌を死ぬまでに1冊でも2冊でも書けということを言われて、私自身もそういう道を選び取ったものですから、今申し上げました三つの柱を軸にして、地域の民俗誌を書いていくということが私の方向軸になります。

それからひとつの前提を申し上げなければいけないんですが、私のフィールドは基本的には日本です。あと、若干、韓国の漁村調査、中国江西省の農村調査、ネパールの集落景観の調査の経験がございますけれども、基本的には日本人が日本人に聞き書きをするという状況を前提とした話であるということ。

私は民俗学の道に入るはるか前、小さいころの自分の少年、子供時代の体験というか印象として、漠然とした疑問としてずっと抱えていたことがあります。私は昭和24年、1949年生まれです。私の親の世代というのは、戦争体験者なんです。彼らは、その戦争のことを自らは話さなかったんです。だれかが聞こうと思ったら、「話しても分からない。伝わらない」と。でも、戦争体験というものが彼らをものすごく規定している、彼らはこだわっているということは、子供でも外からはっきりと分かるんです。一番こだわっているものを、彼らは話さない。そうすると、話せない、話さないということが、すごく大事なことなんだということになります。けど、小さい時は、そんなふうには思いませんよ。何か自分の親たちは変だなと。そういうふうな印象しかないんです。例えば、私の父親は学徒出陣で、海軍で特攻隊でした。本当に偶然の連続で生き残って、友達全部死んでいます。私のおきななじみの父親は、これは第二次大戦史を知っておられる方だったら分かると思いますが、インパール作戦というめちゃめちゃ無謀な作戦に従事して、これは敵にやられるよりも日本軍の作戦のずさんさで病死者、餓死者が多かった作戦なんです。そこから生きて帰ってきています。これはものすごくドライな言い方をすると、戦友を見捨てて帰ってきたんでしょう。けれどもそのことを責め得る立場に立てる人はほとんどいないと思います。

そういう人たちは、絶対戦争のことは語りません。語らないということのひとつの意味というものを、小さいころ漠然と親たちの世代の中に見ている。実は本当に偶然なんですけれども、来週同じようなテーマで、沖縄大学でシンポジウムがあって、私はそれにやっぱり来いと言われてるんです。本日のテーマは「〈残された声〉がもたらす豊穡」ですね。沖縄大学のシンポジウムのサブタイトルは、「語られなかったことのリアリティー」です。私は、沖縄だったら、それはとても大事な問題発想の仕方じゃないのかなと思います。ここの本日のタイトルとあたかもネガ・ポジ関係ですね。見ようとしているものは同じだと思います。ですから、オーラル・アーカイヴといわれる資料のことを考えるときに、語りとして残らなかったものへの配慮。残らなかったものはどうしようもないんですけれども、それは頭の中のどこかに置いておかなければいけないなと思っております。それは逆に残されていく資料に対してもひとつのマナーのように感じています。

2.

今まで私自身、どのくらいの人にお話を聞いたかなと振り返ってみますと、大体400人ぐらい。こういうのはカウントするようなものじゃありませんから、ある時ふと気付いて、振り返ってそのくらいになるのかなと。この中には、何十回と通った人もいます。一回2時間だけで終わった人もいます。そういった体験の中で、じゃあ聞き書きって何だろうかと。振り返って幾つか、私がお話できる点を、ここで少し述べて、何とか時間まで責をふさがせていただきたいと思っております。

まず私が10年程前に書いた文章を、少し読ませていただきます。頭の中にお話しする素材が乏しいものですから、自分の文章で恐縮ですが。

「7年ほど前から四国山中のある村に通っている。ここに明治38年生まれの古老がおられる。その人の話を聞きにお宅へ伺った回数は、もう何十回になるだろうか。往復90分の録音テープに記録した話の量だけで、50本を超すが実際に話をうかがった量は、その倍ではきかない。まだ話が切れる気配はない。1度として重複した話も出てこない。それどころか、聞けば聞くほどこの土地の背負ってきた文化が、その人の一生の中に凝集してあらわれており、それがひとつの体系をもって目の前に展開していく。

夏の午後、話がひと区切りついた時に、開け放した縁側からアブが唸りつつ飛び込んでくる。そのアブを追いつつ、話はこの地のアブの種類やその牛馬への害の防ぎ方へと移り、さらにはさまざまな昆虫に対するこのむらの人びとの認識へと広がり、それがそれまで聞いていた焼畑の話とむすびついていく。

秋の夕、ふと湯呑みを置いて向かいの山の端に入る太陽に目をやると、その山の景色が幼少時の自分にとって何であったかについて話がほぐれてくる。それはまた、山に囲まれた村にとって町場とは何であったかという問題に結び付いていく。もとよりその聞き手は私である。半ばはおじいさんの話に任せつつも、そのあいづちの打ち方、話の切り口の設定などに、私は私で問題意識を持ち出していく。こうして何十時間も話を交わしていくと、そのおじいさんの背負っている生き方——ひいては文化——と、私の生き方が切り結びを始める」。

ここまで人間というのは自分の背負ってきたものを体系的に、しかもいきなり話せるのかなと、まず驚くんですね。その次に、自分自身の中にそれがいいのかと。体系としてあらわし得るものがあるのだろうか、あるとすればどんなふうななんだろう、と。どうしても自分の中をのぞいちゃうんです。おじいさんがこんなふうにしたら、じゃあ次に私は彼に質問をこんなふうにつけてみようと考え、たずねる。その質問のぶつけ方の組み立てって、私の中にある生活というものの組み立てです。枠組みですね。そのおじいさんの話を聞けば聞くほど、私がこれまで背

負ってきた自己というものを見つめるはめになる。それは先方がひとつの体系を持って表れるだけに、自分が今ここにこうした形で存在しているということについて、ある体系でもってとらえるにはどうしたらいいのか。極端に言えばそうした問いを突きつけられていきます。別に、そのおじいさんが突きつけているわけじゃないんです。それは、あくまで自分の中で自分に対しての問いかけです。ただ、こうした時間というのは、ものすごく面白いんです。

多分、こうした時間を持った人間ってのは、ずうっと人の話を聞くことを続けるだろうなと思うんです。つまり、聞くほうが話す人によって照り返された自分の姿を探っていくことにつながるんです。だから、私がどんなにそのお年寄りの話をテープやメモをもとに忠実に記録しても、そこに立ちあらわれてくる本質というのは、そのおじいさんの姿じゃなくて、私の中に刻み込まれた、私の網の目の中に刻み込まれた彼の残像です。

それからしばらくたって、私はこのむらの民俗誌をまとめることができたんですけども——その時はもうテープは100本を超していました。それを全部私書きおこして、私がこの地の文化というのはこうであろうという私の理解、洞察のもとにまとめていったわけで、決してその土地そのままの姿ではない。

こうした聞き書きの時間は、すごく面白い時間なんです。つまりこれは自分がなに者なのかを理解していく営みの中に潜む快感だと思います。この時に、ごく自然に私が納得して受け入れてしまっていることがあります。それはこの聞き書きを私取りまとめ得たとしても、私その場で受け止めた一番大きなものは文字で表して他者に伝えることができるのかな、どうも、それはできないんじゃないか、と。

それはこれからの私を歩かせ、人の話を聞くことを支えて、私が他人の取りまとめた聞き書きを読む時に洞察として働くことはあっても、私取りまとめたレポートの中には、ほんの少ししか伝わらないのではないかと。多分それを表現するとすれば、本当に月並みな言い回しになりますけれども、暮らしをたてていくということを支えている体系へのイマジネーションということになると思います。目の前にいるひとり人間が、自分の生活体験を語ってくれている。その言葉は、大変洗練されています。でもそれは考えに考え、練り上げられたゆえの洗練ではないんです。すぐにその言葉の端から、その背後の暮らしにほどけてつながっていくような膨らみを持ったものなんです。完結した言葉ではないのです。

だから、そこで私に伝わってくるのは、言葉で表現された彼の暮らしなだけで、彼を生きさせてきたものが言葉という媒体に変わっていく姿、ダイアログの中で言葉が引き受けてくれる経験の在り方です。その場が解けて、おじいさんが家の奥に入って、私がお宅を辞したら、言葉につむぎ出された暮らしの骨格は、私のノートとかテープに残りますが、でも、もうひとつのなにかはどこかに消えちゃうんです。私の中に、私が受け止め得る形で残るだけです。

ですから、聞き書きというものは、他者の個を垣間見せてもらうことによって、自分の中をあらためて深くのぞき返すような時間を、その中に生むと思います。それはまた、ひとつの問いを引き出します。今自分はひとりのお年寄りの前に、ひとりとひとりと向き合って言葉を交わ

しているけれども、この二者の個というのは、果たしてどこが本質的に同じなんだろうかと。

私を取りまとめた記録は、私に刻み込まれた彼の残像に過ぎない、イメージに過ぎないというふうに言いましたけれども、その延長線上で表現するのであれば、ではそのとき私って何だろうかと、彼って何だろうかと、いうようにも言えるでしょう。私は大体抽象的な思考が苦手な人間なんですけど、そういうことをつい考えてしまいます。

それをすぐに、たとえば地域に根付いた伝承文化の継承者と都市生活者の差異、といった言葉に置き換えると、問題は解決しません。単なる言い逃げです。いったいあれは何なのだろうかという形で、それは当分私の中に、持っていかなきゃいけない存在としての問題だと思います。

ここまで申し上げると、あるいは「何を大げさな。ひとつひとつの聞き書きで、おまえはそんな時間を持っているのか」と質問が来るかもしれませんが、そんなにこういう経験はあるものではありません。私のこれまで30年余りのなかで、おそらくこうした時間を与えて下さった方は、3人から5人なんです。せつかく聞き書きの時間を割いていただいていたいて、本当にこう申しあげるのは大変失礼なのですが、うんざりしてしまうような時間を生む聞き書きもあります。聞き書きの資料が大事だということを前提としても、もうしばらくは聞き書きは嫌だなと思わせるような時間もあります。

でも、これまでの聞き書きを振り返ったときに、聞き書きという方法の本質にかかわると思える体験を幾つか思い返してくると、まずそうした自己を問いかえすような時間があります。ただし、そういった時間を持ち得ないような聞き書きが、だからといって劣るとは全く考えていません。本質から外れるとも思っていません。何よりも、聞き書きというのは、聞き手と話し手の関係性が大なり小なり関わり規定しますので、相手にお会いして話を伺って見ないと、どんな展開になるか分からない、その中で、研究資料を作っていく作業をする。それらの総体が、聞き書きという言葉の間口の中に、全部詰まっているんです。だから、何かかいつまんで話さなければいけないということになると、振り返ってみてちょうどそこから海の中に浮かぶ島のような形で思い返せる体験、時間を、幾つかここで述べさせていただこうと思っております。まあ、私のこんな発想表現自体、ひとり語りの聞き書きみたいなものですね。

3.

もうひとつ、これは私が師事した宮本常一の書いた文です。30年ほど前の文なんですけれども、「戦前歩いていたところに、60代の老人の話はどうも信用がおきにくかった。自分の見聞にさらに自分の意見が加わっていた。これは明治の興隆期に青年時代を過ごした人たちで、いわゆる文明開化を何らかの意味で体験しているのである。その人たちは、今80以上になっている。だから、年を取っているというだけで伝承者として比較的古いことの記憶や体験が乏しいようである。現代の人々が古いものをかなぐり捨ててきたと同じように、そういう時代が過去にもあったのである。だから民俗学も、もう古老たちの聞き書きを中心に資料採取をする時代は、半ば過ぎ去ったのではないかと思う」と。

こう書いています。宮本先生は聞き書きをずっと続けられてきた方なんです。自分は聞き書きが有効な時代に生きて、もうこの方法は駄目なんじゃないかと言う。じゃあどうするんだと言いたくなるんですけども、ただ、宮本常一というのは、さあどうしようかと模索を楽しむ人でした。この文は模索にむけての意味が大きいように私には読めるんですが。

その文に続いて、「いつのころからか、非常に散文的なものの言い方というものが発達してきます。われわれが日常話をしている言葉というのは、大変散文的な言葉なのですが、そういう散文的な言葉は、われわれは覚えられるものじゃないんです。きょう話したことは、明日忘れている。あるいはあざってになると忘れてしまっている。ほとんどそうなって、話し捨て、聞き捨ての言葉が、こんにちでは満ちみちています。それを今残しておこうとすると文字に頼っている。文字に書いておけば残る。しかし文字に書くにも書きようがない時代には、今申したように形にはめることでその言葉を長く残す以外はなかった。やはり明治維新というものが大変大事なので、明治以前を生きた人たち、その時に青少年期を過ごした人たちと、それ以後の人たちと、もうすっかり変わっておったんじゃないかという感じがするんです。（中略）それ以前の人たちは日常会話すら、すべてその中に一種のメロディーみたいなものがあつたんじゃないかという感じがします。われわれ子供のころ、年寄りの話を聞いておりました記憶では、みなこんなに抑揚のない話し方をするなんていうことはなかったですね」と、こういう指摘が続いています。

だから私がフォークロアを始めた時代というものは、ここでいう「前近代」が消えた時代です。それをひとつの前提として、もうひとつのことをお話したいんですが、事実というものは位置付けをされて、意味を加えられてこそ事実である。そういう時代に、私たちは生きていると思います。近代教育というのは、そういうものだと思います。

私が若いころ、先輩からいろんなアドバイスを受けた中で、学校の先生だった方から聞き書きをするときは少し注意したほうがいい。つまり、近代教育の場というものは、事実を事実として話すのでは意味がなく、そこに位置付けを話してこそ、近代教育である。そうすると、そんな世界に40年、50年とおられた方は、自分の発想表現がそれに習い性になっていて、実際にあったことと、そうあるべきこと、あってほしいこと、それが時々ないまぜになるから、話す時間をとってくださったことにはきちんとお礼を言わなきゃいけないんだけど、資料としては非常にデリケートな注意をもって受けとめるように、と言われたことがあります。

ただそういつてしまえば、これは当たり前のことなわけで、私自身もそうですけれども、人が自分の過去を振り返って語る時、これは過去を意味付けします。後知恵も正当化も入ってきます。確かに過去を消し去ることはできない。でも、そのことにとらわれて生きているつもりはない。自分は過去の自分に封じ込められたり、傷つけられたりせずに、こんなふう位置付けて振り返るほどは自由なんだ、という世界を持ちます。前向きに生きるというのは、そういうことだと思います。変えられない過去の時間、出来事と、それを位置付けすることによって、より自由な生を生きようとする姿勢。聞き書きから手繰り寄せられる世界というのは、そのふたつの面で成立しています。決して、過去そのものがそこで展開するわけではないんです。だから、聞く人

間は何かすごく大事なものに会ったような気持ちになるんです。聞き書きをどんどん続けていきたくになります。

4.

でも、もうひとつ言いますと、そんな枠組みがぱんとはじけて消える時間というのがあるんです。位置付け、意味付けといった枠が瞬時に消えて、30年前、50年前、その時その場の感性が、話し手からむき出しの形で外に出るんです。これは、おそらくだれにでもそういう表現を現出する潜在的な可能性というのはもっているんじゃないかと思います。ただ、私が聞き取りに行くと、そんな時間に遭遇するのは、本当に3、4年に1回なんです。この時間は何だろうと思うような時間があります。

だから、その時間というのは、全部覚えています。一番最初は学生のころ、伊予の山の中で聞いた、あのおじいさんの話、最近3年前に能登半島の漁師のおじいさんがそうだった、と。つまり、お祭りの場の血がたぎるような昂揚とか、大漁の時の充実感を、ただそのまま外にごろりと表現しておしまいなんです。あとは、あんたが勝手に受け取ってくれと。

今多くのお年寄りに、たとえばお祭りの話を聞きますと、最後に必ずまとめがあるんです。「今と違って、昔は娯楽が少なかったからね」と。つまり、昔のことを語っているのに、最後に今の時と場に戻って、ふりかえってまとめをするんです。それは不自然なことではないんだけど、位置付けだと思えます。

昔の大漁のことを話すと、そのまますぐに今の資源枯渇を嘆く立場にすつと行っちゃう。そういうことにかすりもせず、あとはあんたが勝手に受け取れと。自分はある興奮、感動をそのまま確認しただけだ、と。私の深読みかもしれませんが、その時、その人の表情の中には、あの時の体験というのは間違いなく今の自分を支えてきたものなんだから、どう解釈されようと勝手だよという、大変純粋なものを感じることがあります。浮世の動きはまた別のこと、と。

これはひょっとしたら、こう言うところちょっと大仰かもしれませんが、「近代の意味づけ」の割れ目から顔をのぞかせた「非近代」、——と言うところちょっとこれも時代にとらわれ過ぎているようだと思うんですけども、「近代」の枠にはまらない^き生の状態と云えばいいのでしょうか。人間というのは過去を位置付けて生きていけます。けれども、それが時々ぱんとは割れるような衝動も、己を支えるものとして内に持っている。だから、その家を辞して玄関から1歩外に出ると、あの時間って何だろうと思えます。当たり前のことしか話してはいない。でも、聞き手の気持ちをさまざまに誘発するものがそこにあるんですね。つまり、今の私の立っている場所を揺り動かして気付かせてくれるものが、何かその中にあるということだと思えます。

5.

私が師事した宮本常一という人は、私にずっと追究していきたいと思う表現を幾つも話し、書き残してくれているのですが、そのひとつ、「何かを知っているだけでは思想にならない。自分

自身のことで言えば、瀬戸内海の島で生まれた農民の子で、農民、それも西日本の農民の目でものを見ている。そこから僕の思想が生まれるし、発想がある」。

彼の行動とか著作の中にこの言葉を置いてみると、「西日本の農民」というのは単に地域と職業を示したものではないんです。存在や思考そのものを定義付けていると言っていいほどの力を持つものであります。そうすると、すぐ、やっぱり私は自分の中をのぞくんです。宮本常一にとって、「西日本の農民」という概念は、私の場合は一体どう表現する何なんだろう。あるいは、この会場におられるひとりひとりの方にとってどう表現し得る何なんだろうか、と。もちろん、その答えは、あるいは明確な、手短かな単語で表現し得る性格のものではないかもしれませんが。そんな姿の問いかけで私の中でずっと持ち続けなきゃいけない、ある種の存在確認みたいなものかもしれませんので。

ただ、今、聞き書きのバックステージで起こっているようなことをずっと述べましたけれども、その述べてきたことは全部そこに収斂します。向き合っている対象が個人である以上、その照り返しというのは自分個人の中にそのまま戻ってくるんです。その聞き手の個に即して、手探りを始めるんです。地域社会といった概念はあくまで、その個の狭い水脈を使う形で表れてきます。ですから、これは人格性、個別性が強いアプローチということになるんですが、ただ、今まで私が話したわくわくするような時間というのは、普遍性への手ごたえを感じさせる明るさが確かにあるなという感じももっています。大変個別的な、人格的なアプローチなんですけども。

水脈というのは、本当は自分の中にある。最も大事な選択肢というのは、実は足元にほこりをかぶっているんじゃないか。こんなふうに世界を広げていってしまうってのは、「研究」、「学問」の世界からはみ出してしまうことかもしれません。研究、学問の世界というのは、そこから1回引き離し、離してからある客体として見るという手づきがあって、そこから論文、レポートの世界というのは広がるわけで、私がここでお話ししていることは、あくまでバックステージのことです。

でもこれはある意味では、あんまりフェアな話ではないんです。つまり、言葉という手段で体験を分節化して、それでとらえきれない、すくい落ちてしまうものに関心を奪われて、そうしたものの存在を受け止めていったからこそ、逆に聞き書きを続けてきたんだと。私の中ではつじつまが合っているんだけど、どこか矛盾しちゃうんです。おそらく第三者からすればアンフェアじゃないかと思われるでしょう。だったら、言葉でどこまであらわし得るか追究しろと言われると思うんですけども、聞き書きの現場からの資料化は、伝わるものと伝わらないものがあると感じています。

もっと踏み込んで言いますと、目の前に1本のカセットテープがあるとします。そこからいろんな話が出て、それはひとつの記録として成立して、いろんな人が使う。でも、そのカセットテープが存在している過程というのは、目に見えない問題意識のすそ野がそこにあって、本当は聞き書きを続けさせるシステムというのは、そっちにも潜んでいる。

ひょっとしたら、その中に聞き書きということを考える本質の何がしかは、潜んでいるのでは

ないのかなという気がします。つまり、言葉で表現している作業を続けたんだけど、でも本当のモチベーションというのはそこにはないなぞと述べるのは、大変申し訳ないことだと思いますけれども、フィールドで聞き書きを行った方であれば、そして少なくとも質問要項を用意して、それを埋めていくというような聞き書きではない聞き書きをやった方であれば、ひょっとしたら私の話に対して、何をおまえは当たり前のことを言っているんだ、別にそんなことはいちいち言挙げをすることかと言われることかもしれません。

もうひとつ、先ほどちょっと申し上げましたように、聞き書きというのは本当はしんどい作業です。聞きたい時に行って、向こうが対応してくれて、ということばかりではないんです。たとえば自治体史の仕事などで、定められたスケジュールの中での聞き書きですと、午前中1人、午後1人、夜1人。それを1週間続けると、本当に玄関の前で1回深呼吸をしないと、その家に入れない。人が人の話を聞くということは、ある意味ではすごく不自然な時間かもしれません。そういう思いも、どこかにあります。

それから、もっと根本的な問題として、最後にひとつだけ申し上げておきますが、四国の山の中で、私のために何十回も受け入れて話をしてくれたおじいさん。なぜ私を受け入れてくれたのかな。これは、ずっと考えなきゃいけないんです。私は学生のころ、四国の山の中を1カ月旅行したことがあります。1カ月、金を1文も使っていないんです。どの家も泊めてくれて、話を聞かせてくれて、出る時は弁当を作ってくれて、気を付けて行って来いよと送り出してくれて。そういう経験をした人間って、私以外にもたくさんいます。なぜ受け入れてくれたのかという問題。それも、本当はすごく大きな問題です。でも、これは今日の議題から外れると思いますから。

お話ししたかったのは、1本のテープが支えている、見えないところのすそ野の中に、本質につながる問題もいろいろあるのではないかと。固定化された記録って、自分が思っている以上に、あてにしてしまうんです。「近代科学」って固定化を求めます。脅迫に近いくらい。固定化しなければ先にすすめないこともたしかですが、その時はむしろしたものの存在もどこかにとどめてほしい。はずしたものはそれとして向きあう時と手間を持ってほしい。そうしないと、せっかくなしくい取ったもの自体も平板化します。そのことを一言申しあげたかっただけです。

資料をどうやって保存活用するか、それがどれほど意義があるかということは、これまで何人かの方がきちんと、大変洗練された形で説明してくださいましたので、私の話というのはどちらかというと色物的になりますが、私はこれまで聞き書きというのを完全に手段として考えてきました。これを問題として、主題として考えるということを必ずしも正面からやってきたものではありませんので、こういう形の発表で、終わらせていただきたいと思います。大変雑駁な話で申し訳ありませんでした。